■ 特集「体験学習の実際とヴィジョン」

南山短期大学の誕生と人間関係科の教育実践について

「人間の尊厳のために」の理念を具現化するための教育実践

中野　清（南山短期大学教授）

●すべては「人間の尊厳のために」

1947年のある日、その人は、上智大学の中央事務局で用事をすませると、四ッ谷駅に向かって考えながら道を歩いていた。東京の廃墟を見つめながら、またこれまでかれが体験してきた三つの戦争がもたらした惨い状況のことを、人間はこのような混乱と災いのために生まれてきたのだろうか。果たして人間の価値はどこにあるのだろうか。その時、突然、「人間の尊厳」ということばが脳裏にひらめいた。道端に立ちつくしたまま、かれはこのことを考えていた。その人の名は、アルベルト・ボルト神父。後に南山学園長、南山短期大学にとっては第2代学長となるひとりのドイツ人宣教師に訪れたこのひとつの出来事から、現在南山学園が建学の精神として掲げるモットー、“HOMINIIS DIGNITATI”「人間の尊厳のために」ということばは始まったのです。南山短期大学に面して建つ南山学園講堂に立つと、今もその正面の壁に深く刻まれたこのことばを見ることができます。

●使命としての学校(1932)

南山短期大学の設立母体である南山学園は、今から62年前に最初の一歩を踏み出しました。ローマに本部を置くカトリックの国際的な修道会「神言会」(S.V.D.)の会員であったドイツ人宣教師ヨゼフ・ライネルス神父は、当時の教皇ピオ11世の命を受け、名古屋に中学校を設立することを決心しました。その目的は、ヨーロッパと中部日本の間に文化・哲学・宗教の対話と理解の架け橋をつくることにありました。ライネルス神父の信念にもとづき、この学校は一人ひとりの個性を尊重した教育を行うために、小人数のクラス編成による自学自習主義が教育方針に掲げられました。しだいに戦時色を強めた日本では、

外国人であったライネルス神父は責任者の地位を辞任せざるをえなくなりました。この学校を神の使命と考えていたライネルス神父は、学校の存続を第一に考えたからです。かれは南山の発展を望みながら、終戦の2週間後、8月28日、多治見の神言修道院で永眠しました。この厳しい試練の時代が、偏狭なナショナリズムを越えた真の国際性の必要を南山に教えてくれたのです。南山学園はその後、「人間の尊厳のために」を共通の建学の理念として、現在の中・高等学校（男子部・女子部)、大学、そしてこの短期大学、さらには国際中・高等学校を次々と生み育ててきました。

南短のはじまり(1968-1973)

●英語科の設立(1968)

学園の根本的理想を実現するための一員として南山短期大学も誕生しました。1960年代に入った頃から中・高等学校女子部の教員、同窓生や保護者を中心とする地域社会の人々から、南山に女子短大を設置してもらいたいという要望が次第に高まり、これに応えて理事会は新しい教育計画でこの短大をつくる方針を立てました。その基本方針は、地域にすでにある短大に似たものではなく、新しい理念に基づき、社会の要望にそいながら、南山独自の教育を行うものとすることでした。新しい学科は、「英文科」ではなく「英語科」となり、1968年4月135名の入学者を迎えて開校することとなりました。この新しい英語科の特徴は、「オーラル・イングリッシュ」（英会話）に力を入れ、ＬＬ方式にたよらず外国人教員が直接教える時間を可能な限り多くすることでした。こうして実践的英語能力を身につけた真の国際人たる女子を育てる場として南短はスタートしたのです。

●人間関係科の増設(1973)

スタートから3年後の1971年に新校舎が現在地に完成し、当初よりの計画であった、英語科に並ぶもうひとつの学科を増設する時期がやってきました。ミッションスクール南山にふさわしい学科をつくりたいとする模索のなかで、最終的に人間関係科の設置が提案されました。短大としては、日本最初の人間関係科の誕生でした。この科は、実践的な人間関係能力の育成を基本とすることを強調し、「人間関係学科」ではなく「人間関係科」と名づけられました。これは哲学・心理学・社会学・教育学を専攻する教員を主体に構成しながらも、カリキュラムはそれぞれの専攻やコースに分けることなく、アメリカで始まった行動科学的方法論である「体験学習」方式を活かした統合教育を行おうとするユニークなものでした。教員は専攻分野を越えてチームを組み、半日あるいは一日をまた集中合宿の形態で授業を行う我が国では全く新しい教育の試みでした。

南短教育の充実へ(1980-1988)

1980年代は授業改革、施設の拡充が盛んに行われ南短教育の内容と質とを充実させていった時代でした。教学面では、人間関係科で新しい体験学習方式授業として「フィールドワーク」が開始され、英語科では「オーラル・イングリッシュ」担当の外国人専任教員の人員の大幅な拡充と、小人数のゼミ形式で行う本格的な「英文演習」が始まりました。また1983年から米国4年制大学への留学編入制度も発足しました。施設面では、図書館棟の増築と2つのＬＬ教室の設置・隣接するピオ11世館の取得により、パソコン室・ゼミ室・研究室などが増加しました。創立当初全く装飾のなかったキャンパスに、正面入口にモザイク壁画「聖母子像」、中庭には化粧タイルが張られ、出会いの庭が整備されました。全学のイベント・アワーである「コミュニティ・アワー」が始まったのもこの頃です。こうした努力により、南短は国際色豊かな活気あるキャンパスになっていきました。

地域文化の活性化の礎となるために(1977-1988)

この地域の「文化を育て、成長させ、花を咲かせるための土台石となる」ことは学園創立以来の発想でした。1977年、設立まもない人間関係科の人的・物的リソースを地域へ開放するために「人間関係研究センター」が設立され、さまざまな人間関係研修講座が夜間を利用してスタートしました。また南山の豊富な語学関連のリソースを活かして1983年には「南山公開講座」(現「南山大学・南山短期大学コミュニティカレッジ」)が南短の企画で始まり、1988年には英語科の教育目標「語学力及び国際感覚の養成」を社会的に実現するため「外国語研究センター」が発足しました。

次代に向けて(1993-　)

南短は1993年、創立25周年というひとつの節目を迎えました。10月に催された記念行事では、「人と人とのコミュニケーション」を大切にしてきた南短の文化が、ひとつの花を開きました。アメリカから招いた姉妹留学提携大学の4人の学長の講演、同窓生の集い、学生、教員、職員が全員関わって、2つの朗読劇が南山学園講堂で上演されました。本学教員の作・演出による「Nagasaki Peace Declaration」と「愛の侵略－マザーテレサとシスターたち」は、ともに『人間の尊厳のために』ということばが生まれた「平和への祈り」を人々に伝えるものです。マザーテレサから南短の学生たちに送られた祝いの手紙のことばが南短の教育がこれからに向けて大切にしてゆくべきものを語っています。

「あなたの隣人が誰なのかをはっきり知ってください。隣人を知ることがあなたを、神の愛と一人ひとりに奉仕する愛へと導いていくれるでしょう。」(M, Teresa)

人間関係科の教育

自分と相手をともに大切にする人となる

1973年、日本で初めて「人間関係」を呼称する学科が南山短期大学に誕生し、ひとつの新しい教育への冒険が始まりました。「体験学習」という「プロセスから学ぶ学習法」によって、関係のなかに生きる一人ひとりの学習者が人間的に成長することと、人間および人間関係についての真理を探究することとを統合する新しい教育Humanistic Education（人間そのものを大切にする教育）への試みが始まったのです。

教育の冒険

理論と実践との総合を目指してきた、この教育的冒険のねらいは、1980年以来学外でおこなう「フィールドワーク」を体験学習に導入することにより、一層明確なかたちをとるものになりました。この成果をふまえ1989年には、カリキュラムの全面的な改革を行い、各分野を横断して教員の多様なリソースをひとつのダイナミックな人間関係科の教育体制として組み直し、ここに紹介するようなひとつの教育モデルをつくることができました。わたしたちのこれまでの教育的試みを支えてきたキーワードは“Change Agent”でした。このことばがまた、人間関係科で学び、巣立ってゆく卒業生たちの心にも深く刻まれてゆくことを願っています。

人間関係科のフィロソフィー

体験学習を通して、生きた現実の人間関係に即応しうる人間関係能力を高めることが人間関係科の教育がめざしているところです。

しかし、現実に即応する能力といっても、それは単に人間関係の現場に適応する能力や、問題をかかえた現実をそのままにして人と共調してゆくだけの能力のことを指すのではありません。ましてや人を利用したり操作することに巧みなことでないのは、いうまでもありません。

むしろ一人ひとりの「人間の尊厳のために」、自分に与えられた人間関係の現場を誠実に生きようとする人を私たちは育てたいと願っています。そのためには、現場の人間関係がどうなっているのかを見抜くするどい感性と、そこに人間性を回復してゆくための実行力とが必要です。

これを実現するために、まずかけがえのない自分を大切にして創造的な個性を発揮してゆくことが、つまり人間関係のなかで主体的であることが大切だと私たちは考えます。そのような主体的に自立する個人と個人が相互に援助的に関わることが人間関係のあるべき姿だと私たちは考えます。このように互いに違った個性を活かしあいながら生き生きと関わりあう人間関係を築くことを私たちはめざしているのです。

人間関係科は、こうした人間関係のあり方をお互いに学びあう学習の場として、ひとつの学習共同体です。ここですごす2年間全体が、人間関係を学ぶひとつの大きな授業となってゆきます。

人間関係科のユニークな学び方

1．体験から学ぶ

授業は教師が自分の知識や研究の成果を一方的に講義するのではなく、学習者自身が設定されたグループ状況のなかでまず「体験」してみることからスタートします。たとえば、数人でグループを組み、一人ひとりの持つバラバラな情報をつなぎ合わせながら問題を解決してゆきます。その課題解決の過程で、実際自分はどう動き、感じたのか、グループのリーダーシップやコミュニケーションのあり方はどう変化したのか、などの人間関係の変化の「プロセス」が分析され、そこで気づいたこと学んだことが学習者自身の学びとして記録されてゆきます。

2．学内外での集中授業

通常の大学の授業は週1コマ（90分）ですが、人間関係科の専門科目には2コマあるいは4コマ続きの集中授業がたくさんあります。学外で行われる「フィールド・ワーク」では、毎週1日を養護学校や老人ホームなどへ出向いて自分を役立ててみたり、新しい関係づくりに挑戦したりします。また年2回、5泊6日の合宿形態による「人間関係トレーニング」の授業もあります。普段の生活とは違う状況のなかで新しい自分を発見したり、グループのなかで深い関わりを体験したり、非常に充実した学習体験となります。

3．チーム・ティーチング

多くの専門科目で、異なった分野の教員がチームを組んで授業を行います。たとえば「人間関係プロセス論」では、心理学、社会学、教育学をそれぞれ専門領域とする教員が考え方の違いをすり合わせながら、時に批判しあい、また助言しあいながら、学習のプログラムをつくり、実施します。これによって、学習者自身も多様な視点から自分の学びを認識することができます。

4．独特な評価法

人間関係科では、学習者の知識の量よりも、一人ひとりの総合的な人間的成長をめざしています。また教員は知識の伝達者であるよりも、学習のファシリテーター（援助者）の役割をとります。したがって、ペーパーテストや段階評価は行わず、教員と学習者が目標を設定し、その水準に達したかどうかをもとに「合格」（Pass）「不合格」（Failure）のいずれかを認定します。また学びを

促進するために必要と認めれば「不充分」(Incomplete) と評価し新たな課題を課すこともあります。

カリキュラム

■履修の方法

卒業要件単位：人間関係科を卒業するためには、「教養科目」で指定された科目を含む20単位（11科目）以上、「専門科目」で46単位以上（必修科目16単位を含む)、合計66単位以上を履修しなければなりません。

専門必修科目は、1年次の「フィールドワーク／フィールドワーク研究法」と、2年間にわたる「人間関係原論Ⅰ・Ⅱ」です。そのほか選択科目では、「必修選択科目」として「人間関係プロセス論」A・B・C・Dより1科目以上、「人間関係トレーニング」A・BのほかC・Dより1科目以上を履修しなければなりません。その他の選択科目については、自分の学習目的と興味に応じて自由に履修することができます。

■2年間の学習の流れ

基本は、自分で自分の学習をつくること

人間関係に関するテーマは広く多様であり、また学生の個性と関心も実に多様です。そのため、人間関係科の授業科目はほとんどが選択科目です。教養科目も、専門科目も、どの科目をどのような順序で学んでゆくかの基本は、学生自身に任されています。しかし、多様な選択肢をまえに何をどのような基準で選んだらよいか迷う人もたくさんいます。必修科目は、こうした多様性の渦のなかで見失われがちな学習方向に、ひとつの明確な流れと着実な学習ステップを提供するものです。

「人間関係原論Ⅰ・Ⅱ」は、入学時から卒業時までの2年間を4人の専任教員チームが一貫して担当します。学生たちは自分の学習状況や課題を検討しながら、全員で人間関係を学ぶことの意味と方向を探ってゆきます。この授業で多くの人がはじめて人間関係科全体がひとつの大きな“学習共同体”であることを知り、そのことを通して人間関係科のベースにある人間観・人間関係観・学習観を学んでゆきます。学生は毎回なんらかの形で授業の感想または小さなリポートを提出することが求められます。それはおおむね翌週の授業でコメントを付けて返されます。この一人ひとりの学生と教員との対話的な関係そのものが人間関係科での2年間の学習に一貫して流れる基調音となります。

1年次の1年間は、金曜日ごとにある学外の「フィールドワーク」先での一日の実習と、その体験を学内で検討する水曜日の「フィールドワーク研究法」の課題に多くのエネルギーを費やします。2年次になると、選択科目が主たる授業となります。そのうちでも1年間を通してエネルギーをかける科目は「研

究プロジェクト」でしょう。これは学生が自らテーマやフィールドを設定し、研究や創作活動をおこなう卒業研究の性格をもった科目です。

人間関係科の科目には、集中授業・合宿形態の授業が多数あります。各学期ごとにある「人間関係トレーニング」では、入学時の合宿(A)と卒業時の合宿(B)には全員が参加します。中間時期には「Tグループ・トレーニング」合宿の(C)と(D)があり、それぞれ2年間の学習の節目となる貴重な体験です。また、グループとコミュニケーションの問題をとりあげる「人間関係プロセス論」と、6つの主要各論は、選択科目群の柱となるもので、これらの科目のいずれかを受講することが勧められています。

体験学習方式を活かし、多様な科目選択肢と学期ごとの学習ステップを巧みに組み合わせたところに人間関係科のカリキュラムの特徴があります。

■専門教育科目

人間関係科にはユニークな名称の科目が多数あります。各論科目のいくつかを紹介しましょう。

●領域Ⅰ【人間論に関する領域】科目のねらい：人が生きることの原点は何かをさぐる。自分の価値観・人生観・人間観などを検討し深めてゆく。

●対話的人間：「我は汝を通して我となる」マルティン・ブーバーの「我と汝」をじっくり読む。

●自己分析：心理検査による自己像の検討と、人格測定の効用と限界を考える。

●創造性開発：自己実現するための創造性は誰にでもある。1週間の合宿で試みる。

●領域Ⅱ【対人関係に関する領域】科目のねらい：人と関わるときの、基本的なことがらは何かをさぐる。

●表現による自己成長：詩を声に出してよみうたってみる。全身がいきいきと表現に向かって動き出す。ことばのやりとりの訓練から、全員で芝居上演するまで。

●自分史：およそ20年の自分の歴史を丁寧にふりかえって、誰のものでもない私の自分史を書く。

●こども：動物園でサルの母子関係を観察。ひるがえってヒトの子どもの状況は？

●T・A：心理療法のひとつであるトランザクショナル・アナリシス（交流分析）を学び、自律的な生き方をさぐる。集中授業。

●領域Ⅲ【集団・社会に関する領域】科目のねらい：人々が仕事をし、ともにくらすときにおこる様々な問題は何か、それはどのように解決することができるか、その実際を知識と体験をとおしてさぐる。

●組織の行動科学：会社組織における人間行動の諸相。卒業生を就職先に訪ね

面接するなど。

●文化と人間：身体障害者の日常生活に触れ、その自立への試みと課題に学ぶ。

●自然と人間：沖縄で10日間の合宿。自然の側から見た人間のありかたをさぐる。

●ヒューマン・リサーチ：面接調査法を学びながら、インタビューを重ね、他者の生きざまを理解し、ドキュメントを書く。

●アジア・セミナー：隣人に学んで、自らを見直し、生き方を変えてゆく。夏休みアジア生活体験旅行も可能。

フィールド・ワーク

“フィールド・ワーク”とは実際の現場でなんらかの活動をすることを意味します。人間関係科では、1年次前・後期の1年を通じ、毎金曜日の一日を学外の“フィールド”に出かけ、体験的、実践的に人間関係を学びます。

フィールドは、現在のところ、養護学校（14校）や老人ホーム・身体障害者施設などの社会福祉施設（9所）が選ばれており、施設ごとに4〜6名がグループとなります。学生は、その日、家から直接自分のフィールドへ向かいます。することは、養護学校では子どもたちの学校生活を先生とともに援助したり、他の施設では老人や障害のある人たちの生活介助や仕事の手伝いをします。そこでは、年齢、性別、立場、考え方など自分とは違った人たちと関わりが生まれます。また任された仕事に対しては責任が生まれます。その人たちと一日を生き、自分をそこで役立ててみようとする行動を通して、人間の尊厳性への深い理解や他者や自己への理解を深め、他者とどう関わることが大切かを学ぶ機会となります。

子どもや老人、障害のある人たちとのコミュニケーションは、相手から与えられるのをただ待つだけではなく、自分からの働きかけがあって、初めて成り立ちます。そういう意味では、自分の他者との関わり方がもっとも問われる授業といえるでしょう。

「フィールド・ワーク」は専任教員全員が各施設を分担して担当します。学生はフィールドでの体験や気づいたことなどを、毎回「ジャーナル」として記し、それを担当教員に提出します。それは翌水曜日午後の「フィールドワーク研究法」の時間に、教員のコメントが書かれて返されます。こうしたデータをもとに自分たちのフィールド体験をわかち合い、討議をします。フィールド体験を明確化するための実習や講義などが全員を集めて行われることもあります。前期末と後期末には学習のまとめとして、フィールド先の人びとを招いて発表会が行われます。

人間関係トレーニング

日常の生活の場を離れた、自然豊かな高原で5泊6日の期間で合宿形態で行

われるこの授業では、体験学習が最も集中的なかたちで行われます。卒業までのそれぞれの学期に、合計4回の合宿が開かれます。これには2年間の学習段階に即したねらいをもつ、3つのタイプがあり、いずれも専任教員全員が担当します。つまりこの合宿の期間は、人間関係科がそっくろそのまま学外に移動したことになります。学生も教員も、日常の人とのかかわりを一時中断して、「今ここで」出会う人との新しい関係づくりに、集中してゆきます。その場での自分の感情の変化や、そこでのグループの人たちの間におこるさまざまな出来事、自分の周りの世界の変化への感性が澄まされてゆくのをきっと体験することができるでしょう。それは人と自然へのより人間的な関わり方を学ぶ貴重な時間でもあります。

合宿の前後に学内で準備とまとめの授業があります。

●<オープニング合宿>信州の山村左右高原の5軒の民宿に分宿し、そこで新しい友となる人たちとともに生活をし自然を味わう中で、人間関係科の学び方を体験し、新しい自分の発見にチャレンジしてみます。課題をもった仕事グループの体験として、食事の自炊にも取り組みます。(この合宿は3泊4日)

●<Tグループ・トレーニング合宿>人間関係科誕生の出発点となった合宿です。10名程度のグループにわかれ、「いまここで」出会うメンバーどうしが、互いの意向の紳士に聴き合い・伝えあうことを通して、相手とぶつかることの大切さ、それをこえて相手を理解することの喜び、自分を知るためにどれほど他者の存在が大切であるかを体験的に学ぶことができます。また、グループ(小さな集団)がどう変化し成長するかのプロセスを体験的に学ぶことができます。宿舎は木曾御岳高原の名古屋市市民休暇村および清里高原の清泉寮です。

●<卒業時合宿>2年間の学習の総まとめとして、また新たな自分と自分の人間関係へのチャレンジの出発点として、自分を人との関わりのなかで活かしてみる機会となるでしょう。

人間関係科のシンボル21番教室

No.21は普通教室の4倍の広さがあり、床にはカーペットが敷かれ、冷暖房完備、当然Take off your shoesです。

「人間関係原論」や「プロセス論」ではさまざまな形式の授業がこのNo.21教室でくりひろげられます。

ある時には、寺子屋のように先生も学生も自由なスタイルで床に座って、(中には寝ころんでいる人もいたりして…)授業したり、またある時には、一人ひとりがテーブル付きのイスに座って、「自分自身への気づき」をメモしたり、また、小グループに分かれて六角形のテーブルを囲んで、テーブルのまん中に大きな模造紙を広げてマジックで意見を書きながらディスカッションやブレーンストーミングに取り組んだり、100人の学生の大討論会をしたり、時に

は、みんなで広い空間の中を自由に歩き回って、自分が他の人と出会うときに起こる微妙な心の動きを研究したりします。

『ボディ・ワーク』という授業ではジャージに着替えて、自分の“からだの動き”に目を向けたり“からだ”を通して自分の主体としての存在の仕方に気づいたり、瞑想をしたり。こういう不思議な授業もあります。

芝居を上演する『表現による自己成長』という授業はNo.21教室をフルに使います。固まっていて自由に動き出さない自分の“からだ”をほぐしたり声を出したりするレッスン場に、上演計画を話し合ったりするミーティングルームに、時には衣装や装置作りの工房にもなります。そして上演するときにはNo.21教室はスポットライトを備えた小劇場に早変わりするのです。

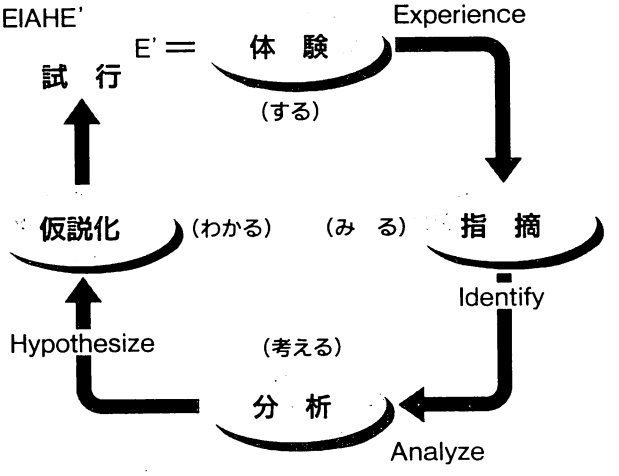
この教室には、過去の人間関係科生の残したものがたくさん生きています。さまざまなテーマでまとめられた卒業研究の書類。壁を飾る巨大な版画はチームワークのトレーニングでの創作作品です。靴を置く棚でさえ人間関係科の先輩たちの力作なのです。教室のまん中には「日の柱」と「月の柱」とがあり、この柱を飾る陶壁画も先輩たちの作品です。

最後にお話ししておきたいのは、No.21教室から見る夕焼けと町の灯の美しさです。レポートをまとめるために遅くまで学校に残って話し合う人たちに与えられる贈り物です。夜になると、人間関係研究センターが社会人のために開いている公開講座もこの教室で開かれます。ビジネスマンや教室、看護婦さんやカウンセラー、主婦や他大学の学生などが集まって人間関係科と同じ授業を受けているのです。

ミニレクチャー『体験学習のステップ』

人間関係科の体験学習が基礎におく考え方は、わたしたちが日常的におこなっている試行錯誤しながら問題を解決する方法を見つけ出すときと似ています。

『体験学習のステップ』



図にあるように、

(1)まずははじめに体験(E)があります。

(2)ここで体験されたことを指摘する(I)段階がつぎにきます。起こったことから、状況、自分が感じたり気づいたことをできるだけ詳細に拾い上げデータを集めてゆきます。この際自分では見えない死角が必ずあることに注目することが大切です。そのデータを補ってくれるのが、他者からのフィードバックです。とりわけ人間関係の中での自分の振る舞いは自分自身では見ることができません。他者から貴重な指摘を得ることができます。また私も相手にフィードバックすることにより、相手を援助することになります。

(3)つぎに個々で集めたデータを分析(A)します。問題点を探りだし、その要因や特徴を挙げてゆきます。この段階では、既存の理論や文献からの知識が大きな助けとなります。また自分の気づかない他者の斬新な視点や考え方も分析の力となります。この(2)と(3)の段階のために、体験学習では、「ふりかえり」と「フィードバック」をふくめた互いが持っている情報と視点を積極的に提供しあう「わかち合い」が頻繁に繰り返されます。自由に情報が提供しあえる信頼の風土がグループにつくられることで、グループそのものも成長してゆくといえます。

(4)こうして分析された問題の解決にはどのような方法がより有効であるか、仮説化してみる(H)段階です。ここでも知的情報と他者の視点は重要です。

(5)最後に上で立てた仮説を実際に試みて、それが問題解決につながるか、行動に移す段階です。この行動により新たな体験(E')が生み出されてゆきます。これは新たな位相での(1)の段階の誕生です。

このようにEIAHE'のサイクルを勧めてゆくことでより有効な問題解決へと近づいてゆきます。こうした諸段階を意識的に行動する学習法が、体験学習です。

＊この文章は南山短期大学を紹介するガイドブックのために書かれたものです。